
空に輝く光

よっし~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に輝く光

【Nコード】

N4697G

【作者名】

よっし〜

【あらすじ】

校長の趣味のせいか美男美女が比較的、多い三日月学園。その中でもトップクラスの“月”と“太陽”と呼ばれる二人の美少女や先輩達と三日月学園では珍しい、平凡な少年である空の物語。

プロローグ（前書き）

初です。稚拙な文章で、すみません。

プロローグ

俺の名前は如月きさらぎ空そら

通っている学校は、少々変わっているけど俺自身はいたって普通の、どこにでもいる様な健全な高校生だ。

あくまで俺自身は…だけどな……。

どう言う意味か…？

そうだな。

例えば今、俺は学校に向かっている訳だ。

それだけなのに町の人の視線の殆んどが、こちらに向いている。

なぜか…？

俺の隣には肩を並べて歩いているイケメン君藤田
らだ。

ふじた ひぐも
緋雲ひぐもがいるか

ちなみに俺の親友だが、こいつは凄い。

顔よし、頭よし、家柄よしの三拍子だからな。

わかってくれたか…？

俺の通う学校、三日月学園には緋雲みたいな奴が、うようよいる。

何度も言うつが俺は違つぞ？

ラブコメの主人公みたいに自分の面がいいことに気付いていない、クソムカつく野郎とかでは断じてない。

ただ現実的に普通の男なんだ。

自分で言つてて少し悲しくなつてきた…。

おまけに今日は三日月美少女ランキング（新聞部主催）を決める日だからな。

何のことが…？

まあ、直にわかる。

ただの暑苦しい話し合いだと思つてくれたら、大体は正解だ。

俺にとっては、ただの憂鬱な日だけだな…。

「空、何をボーっとしてるんだ？遅刻するぞ??？」

「ん…？ああ、了解！」

緋雲を待たせるのも悪いから、そろそろ行くな！！

プロローグ（後書き）

初めてですが、これからは頑張ります！応援して貰えたら嬉しいです

第一話 『三日月美少女ランキング』（前書き）

相も変わらず稚拙な文章ですみません。

第一話 『三日月美少女ランキング』

我が三日月学園の、とある教室。

普段は静かなんだが今日は特別。

なぜなら…。

「絶対に太陽ちゃんだ！」

「いいや、花月さんに決まっている!!！」

現在は三日月学園美少女ランキング（新聞部主催）の話し合いをしているからだ。

なぜ、こんなことをしているのか…？

前も軽く説明したが俺達の学校は少しかわっている。

その1つが生徒の殆んどは顔がアイドルクラスにいいと言うこと。

（俺みたいに平々凡々もいるが…。）

他にも幾つかあるんだが最も代表的なのは、これだと思う。

そして幾ら容姿がよくても俺らは所詮男。

だからこそ、この話題は余計に盛り上がる。

それゆえに、この新聞部主催の訳のわからないイベントが始まった。

端的に言つとミスコンだ。

それぞれのクラスが、その中で最も可愛い子を選ぶ。

そして全校生の前でパフォーマンス（過激なのは禁止）をする。

ちなみに一位に入賞したら本人だけではなくクラスにも褒美が入ったりもする。

まあ、それ自体に興味があるのは担任だけだが…。

もう、わかつて貰えただろう。

俺達は、うちのクラスから誰を出すかを決めあぐねている。

と言つよりは意見が真つ二つになっている訳だ。

無垢すひで明るく可愛らしい性格から“太陽”と呼ばれている春日かすが 太陽派。

クールで妖艶、その落ち着きと女子の憧れと言つ意味から“月”と呼ばれる紅葉あかば 花月派かつき。

うちの学年の代表する二人だから、意見の衝突は当然とも言える。

まあ、俺は興味ないけど。

そんな感じで、のんびりしていたら不意に隣の緋雲が話しかけてきた。

「空は、どっちを推す?」

「どっちでもいいよ。」

ちなみに緋雲には同じクラスに彼女がいるので、この話し合いには関係していない。

二代勢力に入っていないからな。

そんな現在は羨ましいポジションにいる緋雲は苦笑いを浮かべた。

「空、とっても言いにくいんだけど…」

「どうした…?」

コイツが口ごもるとか珍しいな。

「現在、二代勢力は15 VS 15の互角で、僕みたいな奴は9人。」

「それが…?」

「うちのクラスは40人。」

「うん。」

「空、 $40 - 15 \times 2 + 9$ は?」

「1…。」

「じゃあ、それは誰でしょう?」

「……………俺?」

「大正解」

それだけ言って緋雲は俺から顔をそらした。

そして、その会話を聞いていた二代勢力は俺に近づいてくる。

な、何だよ…。

「如月!お前は花月さんと太陽ちゃんの、どっちが可愛いと思う?」

「興味ない。」

「お前も男なんだから興味ない訳じゃないだろ?」

「ないもんは、ない!」

「えっ…!?男色?」

「違う!俺は、至って正常だ!!」

「なら選べ!!」

「そんなこと言われてもなあ…。」

「言われても…?」

これは、マジで今更のことなんだけど言ってもいいのだろうか？

「あのさあ……。」「

「何だ？」「

「紅葉 花月と春日 太陽って誰…？」「

「「……………」」「

あれ…？

何か空気が……。

緋雲も何で信じられないって目で見てるの…？

「お前は本当に、この学校の生徒か ……！！」「

「すみませんでした！！」「

凄い怒鳴られました。

だって仕方ないじゃん…。

俺の二人に関する知識って授業前に緋雲に教えて貰ったことだけなんだから…。

第一話 『三日月美少女ランキング』（後書き）

序盤は書くのが苦手で、つまらないかも知れませんがご勘弁を…。

第二話『太陽は小さい高校生』（前書き）

感想とかくれたら嬉しいです。

第二話『太陽は小さい高校生』

凄い怒鳴られて耳が痛いです。

別にいいじゃん、知らなくても…。

ちなみに、あの後うちのクラスからは春日 太陽が出ることになった。

俺がクラス中から怒鳴られていると、紅葉 花月さんが助け船（？）を出してくれたからな。

人が一杯いて顔は見えなかったけど、凜とした声だけはよくわかった。

「私は、そう言ったものは苦手ですから遠慮させて頂きます。」

周りの人達は凄い悶えてたなあ。

「流石は“月”だ！」

「「「やっぱり言うことが違うよねえ。」」」

本当にね…。

後で、お礼を言っておこうかな。

そう思っていると、既に放課後に…。

紅葉さんに近付けねえ！！

凄い人垣が常に出来てて本人の顔すら、まだ見てないし…。

流石は“月”って呼ばれるだけあるなあ。

正直お礼とかは、もういいや。

本人も別に俺を助ける為に、やったって訳じゃないだろうし。

「帰るか…。」

俺は緋雲みたいに部活とか入ってないから暇なんですよ。

バッグを持って、立ち上がる。

今日は何を食べようかな？

そんなことを考えていると、不意に後ろから声が響いた。

「如月くん。ちょっといいかなあ〜？」

振り向くと、そこには凄く可愛らしい美少女がいた。

誰かの妹さんかな…？

見た感じは小学生の高学年くらいだし…。

「君、迷子？お兄さんか、お姉さんはどうしたの？」

すると少女は頬を膨らませる。

怒ってるんだろうけど凄い可愛い。

俺、年下趣味じゃなくてよかった…。

あやうく犯罪に手を染めなくなったよ…。

少女はボソリと拗ねた様に呟く。

「私、高校生…。」

え…!?

今、何ッテ言イマシタ?

この身長、推定140cm位の未発達少女が高校生!?

「お嬢ちゃん、背伸びしたい年頃なのはわかるけど嘘は駄目だよ?」

「嘘じゃないよ!?!?」

何なんだよ、この子。

「あのねえ…。そんな身長の高中生がいる訳ないだろ!」

「ヒドッ!? 私が一番気にしていることを…!! ならこれ見てよ!

!?!」

少女の手には何かがある。

よく見ると、それは…。

「うちの学生証…?」

そこには春日 太陽と書かれている。

「……………」

えっ!?

これが、三日月学園の“太陽”?

「あの校長、幾ら可愛いからって小学生を高校に入れてんじゃねえ

!?!」

「違うから!?! 私は、ちゃんと16歳だよ!?!」

「だから、そんな身長 of 16歳がいるか!?! 例え校長や神が認めても俺は認めんからな!?!」

「そこまで!?! て言うか私たち同じクラスなのに何で今更そんなことを言われなきゃいけないの!?!」

そう言えば、そうだな。

さっきの学生証にも2年B組って書いてあったし…。

てことは、つまり…。

「39の高校生に混じって一人の小学生が……!!何てシュールなんだ!!!」

「まだ言う気!?!」

春日はゼエハアと息をついている。

小さいから体力ないんだろうな……。

さてと……。

「帰るか……。」

「待つてよ!?!まだ私の話しが……。」

「じゃあな、春日。」

「ちよっ……待つ……。」

春日が何か言おうとしてた気がするけど……。

まあ、いいや。

それより今日の晩飯、何にしようかな……。

第三話『邂逅、太陽と月』（前書き）

ちよっとずつモチベーションが上がってきました

第三話『邂逅、太陽と月』

朝の登校の道のり。

空に輝くのはサンサンと輝く太陽。

それを見て俺は昨日のことを思い出した。

「あれは本当に高校生なのだろうか…？」

いや、失礼なのはわかるんだけどさあ…。

何か認めたくねえ…。

そんなこと考えていると後ろから女子特有の甲高い声が響いた。

「そこにいるのは空くんじゃない おはよ〜。」

出たよ。

自称高校生…。

正直、相手するの面倒なんだよね。

とは言え、そう思っても口に出さないのが大人だ。

俺は嫌々ながらも後ろを振り返った。

て言うか1つ疑問が…。

「空…?」

「あう…。そこは、突っ込まないでよう。い〜じゃん！空くんって呼んでも！いいよね？決まり〜」

まったく、このクソガキ。

俺は一度溜め息をついた。

そして、きちんと前を見据える。

そこには完全に対極な二人が立っていた。

片方は昨日出会ったチビ高校生。

相も変わらぬ140cm位の小さな身長にショート of 髪の毛。

クリクリした目が余計に彼女を幼く見せている。

いや、前言撤回だな。

どこを、どう変えようとコイツは一生幼いから脱却できないだろう…。

「今、絶対に何か失礼なことを考えたでしょ!？」

「いや、それは春日の被害妄想だ。」

俺が思ったのは誰もが認める周知の事実だし。

そう思いながら、もう片方に目を移す。

そこらは春日と、まさに真逆。

身長は165cm位で髪は腰まで伸びている。

少し、つり上がった目は強気な感じだ。

しかし本人自体は同学年とは思えないほど落ち着いた雰囲気を出している。

クールビューティーを顕現した様に美しい女性だ。

「春日、そっちは誰…?」

すると、クールビューティー少女は不満そうな表情を浮かべ、春日はあきれている。

俺、何か変なこと言ったかな?

何か嫌な予感が…。

「ねえ、如月くん。教えてほしい?彼女が誰かを。」

春日は意地悪そうな笑みを浮かべているけど可愛らしいだけで別に怖くない。

「焦らさないで早く言え。そして小学校に早く帰れ!」

「私、高校生!!」

「わかった! わかったから早く言え!!」

何かマジで面倒くさい!

「太陽ちゃん…。」

「え…?」

「空くんが太陽ちゃんって呼んでくれたら教えてあげる」

「死んでも嫌」

「そこまで! ? じゃあ、カツツちゃんのごとは教えないよ!」

「カツツちゃん…?」

「そう この子こそ学園の“月”と謳われる……はう…!」

口を押さえる春日。

もう遅いけど。

て言うか…。

「この人が紅葉さん! ?」

「本当に、知らなかったんだ…? 空くんココで、どっやって暮らしたらカツツちゃんのことを知らないでいられるの…?」

「いや、どごちゃってって言われても、強いて言つなら休み時間は主に眠って帰りは早く…だけど…?」

「……」

あれ…?

何で、そんなに呆れてるんだ??

「空くん、もうちょっと学生らしい生活しようよ。」

「うるさい!」

俺、メチャクチャ普通の高校生じゃん!!

失礼な奴め…。

そこで、今まで黙っていた紅葉さんが口を開く。

「随分と、仲がいいんですね。」

「あっ!?!?わかる」

「誰が、こんな奴と…!!誤解だ。」

「酷いよう。」

春日は無視。

「え〜と、俺は如月 空って言います。初めまして…。」
すると紅葉さんは、やはり不満そうな表情だ。

「同じクラスなのに今更、初めまして…ですか。」

「いや…それは…。」

「別にいいです。私は気にしていませんから。」

絶対に嘘だ。

凄い不機嫌そうな顔だし、つり上がった目は睨んでいる様にも見える。

「悪かったよ！何でもするから許してくれ…。」

だから睨まないでくれ。

美人に睨まれるとマジで怖いんです。

「私の時と態度が違っ〜。」

「うるさいー！」

仕方ねえじゃん！？

怖いんだから…。

「何でも、ですか。」

「俺の出来ることで、だけど…。」

「そうですか。では…」

そう言いながら思案顔になる紅葉さん。

自分から言っという何なただけど、これってヤバイんじゃないだろうか？

「紅葉さん…？」

何が来るんだ？？

紅葉さんは思案顔から普段の表情に戻った。

「それでは私を花月と呼びなさい、空。」

え〜と…？

「そんなことでいいの？」

「はい。」

まあ、その程度なら…。

「わかった！これから、よろしく！！花月…さん。」

「カツツちゃんだけ、ずるい〜。私も太陽ちゃんって呼んでよ〜」

「嫌だ！」

ちゃん付けの辺りが余計にそう思わせる。

「うう…。男は、いつでもそつだ。可愛いより綺麗が好きなんだ〜
〜!」

「自分で可愛いって言うのは、どうなんだ…?」

「そこは、気にしないでよう。」

「空、太陽も下の名前で呼んであげてください!」

「うっ…。わかったよ。」

「呼んで、呼んで〜」

「よろしく。う、太陽。」

こうして俺は三日月学園の“太陽”と“月”と出会った。

彼女らは俺に、どんな変化見出すのだろうか…?

第四話『三日月の夕日は沈まない』(前書き)

楽しくなってきましたよ

第四話 『三日月の夕日は沈まない』

平和に、のんびり。

それが俺の日々。

…のハズだった。

『生徒会からの呼び出しです。2 B 如月空。さつさと生徒会室に
来い。』

「……………」

行きたくねえ…。

言い忘れていたけど、俺は一応この三日月学園の生徒会だ。

本当は入りたくなかったんだけど、とある事情で強制的に入れられ
た。

この時期の呼び出しと言えば絶対に美少女ランキングの審査につい
てだよ…。

やっぱり行きたくねえ…。

と、俺は溜め息をついた。

瞬間。

教室のドアがパンツと開かれる。

来たよ、御迎えが…。

そう思いながらもドアの方を見ると案の定“あの人”がいる。

「如月くん。さぼろうと思ってたでしょうけど、そうはいかないわよ?」

“あの人”は相も変わらぬ長くて、綺麗な銀髪をはためかせて俺に近づいて来た。

「別にさぼろう、なんて思ってませんよ。柘先輩。」

「そう。なら、早く行きましょ?」

ニヤリと意地悪く笑う彼女が気付かない様に、俺は溜め息をついた。

柘しち 暁あき先輩。

我が生徒会・会長閣下だ。

クォーターなので髪は銀髪、目も若干蒼い。

それも手伝ってか、やはり美しい人だ。

外見だけは、な…。

「如月くん。今、何か失礼なこと思ったでしょ?」

「いえ、会長は今日も御美しいなあと。」

「そんなわかりきったことを今更、言われてもね。」

「ええ…。そうですね。あくまで外見だけ、ですけどね。」

「それ、どういう意味かしら?」

「そのまんまです。」

この人には決して甘やかしたり、臆したりしてはいけない。

だって。。。

メチャクチャ調子に乗るからな。

しかも、highになった彼女は手がつけられない程にうっとおしい。

実際、去年の俺はそれを知らなかったせいで生徒会なんぞに入ることになったのだし…。

それを思い出して、本日四度目の溜め息をつく。

「如月くん。溜め息をつくると幸せが逃げるって知ってるかしら?」

「あなたのせいです。俺の幸せを返してください。柊先輩。」

「うふふ。無理よ。そんなことより私のことは暁って呼びなさいって言ったわよね?」

「俺の幸せが、そんなこと……ですか。」

「ええ……。あなたの幸せなんて、そんなものよ。そう言えば、さっき幸せを返せって言ってたわね。それは無理だけど私と付き合ってくれたら、あなたを幸せにするわよ?」

「冗談でも却下です。見返りは暁先輩の玩具になることですよ?」

「うふふ。残念。まあ、いいわ。皆が待ってるし行きましようか?」

「はい、はい。」

「“はい”は一回。」

「はい。わかりましたよ。暁先輩。」

第五話『星と夕日と空』（前書き）

一気にキャラが増えますけど太陽や花月も忘れないでください！

第五話『星と夕日と空』

前回から続き、俺は暁先輩に連れられて生徒会室に。

「はあ…。」

「あら、何を溜め息ついてるの？悩み事があるなら御姉さんに話してみなさいよ。」

「じゃあ言わせて頂きますが、毎度呼び出しの30秒後にクラスに迎えにくるのはやめてください。」

何だかんだで、この人も人気だから男子からの視線もとい殺意がキツイ。

「嫌よ。そうでもしないと如月くん、生徒会活動さぼるじゃない。如月くんが来ないと私、会長やめちゃうわよ？」

「嘘つかないでください。ただ俺を玩具にして遊びたいだけでしょう。」

「つぶつぶ…。」

「そこは否定しないんですね…。」

そうこう話している内に、ようやく生徒会室に辿りついた。

中を開けると既に全員集合している。

「すみません。暁先輩のせいで遅れました。」

「あら、如月くんが私の隣を長い間歩きたいって言うからじゃない。」

「あはは。俺が、そんなことを僅かでも思ったら世界が破滅を迎えますね。」

「あら…？じゃあ明日には世界は破滅してしまうわ。これは大変ね。美しいって罪だわ。」

本当に口の減らない人と言うか、喰えない人だ。

「如月くんになら私、食べられても…」

「…二人とも…痴話喧嘩…要らない。早く…座りなさい。」

何か暁先輩が言おうとしていたが夏住先輩の冷ややかな声に、かき消された。

「星華…。」

「えっ！？なんですか？」

「私は…星華…。」

「知ってますよ。」

夏住 なつずみ 星華 せいが 先輩。

髪はセミロングで眼鏡をかけた、おとなしく頼れる先輩だ。

どっかのバカ会長と違ってな…。

「どっかのバカ会長って誰のことを言っているのかしら…？」

「暁先輩、心を読まないでください。」

「それだけ私と如月くんの心が繋がっていると云うことよ。」

「なぜでしょうね。本来、言われたら嬉しいハズのセリフなのに恐怖しか湧いてこないんですが…。」

「うふふ…」

そこで意地悪く笑うと余計に怖いから…。

て言うか…。

「先輩、そろそろおふざけは止めた方がいいんじゃないですか？」

凄い、夏住先輩が睨んでるし…。

とりあえず謝っておこう。

「夏住先輩、すみませんでした。」

「私は…星華…。」

「いや、わかっていますって…！」

すると暁先輩が夏住先輩に抱きついた。

「言うか元々あなたのせいなんですよ……？」

「女心がわかっていないなあ、如月くん。夏ちゃんは君に自分を星華って呼びなさいって言っているの。」

「そうなんですか……？ なつ……星華先輩。」

「……うん。それで……いい。二人とも……早く……座って……。」

「……はい！」

今、思ったんだけど……この生徒会長って暁先輩だよなあ。

第六話 『三日月学園生徒会』（前書き）

生徒会の説明とかが多いです。
読んでみてください（笑）

第六話 『三日月学園生徒会』

我が三日月学園の生徒会は少し特別だ。

まず、生徒からの完全投票で会長が決まる。

そして選ばれた会長が他の生徒をスカウトする。（何人でもいれていい）

勿論、強制はなしだ。

つまり極端な話で言えば全校生を生徒会にすることも可能。（ありえないけど）

そして今、そのルールに従って暁先輩が作った生徒会が全員集合しているんだが…。

「暁先輩、いつも思ってますけど…」

「なぜ今期の生徒会が如月くん以外、皆女の子なのか…、でしょ？
？しかも美少女。」

その通りだよバカ会長。

「バカは酷いんじゃないかしら？」

「だから心と会話しないでください、バカ会長。」

「それは無理よ。」

「何で、ですか？」

「ねえ、いきなりだけど東洋医学の考え知ってる？」

「本当に、いきなりですね。確か、この世の全ては陰と陽で出来ている。病気はこれらのバランスが崩れた状態だから薬などで安定させて治す…でしたっけ？」

「まあ、細かい所を指摘しなければ大体あっているわね。」

「ありがとうございます。それが、どうかしたんですか？」

「うん。病気って言うのは東洋医学で言う陰の方が多くて、陽の方が治りにくいんだよ。」

「はあ…。」

「そして陽とは熱い物や活発な物をあらわすのよ。」

「……？」

「つまり、読心は私の如月くんに対する熱く燃えたぎる、強すぎる愛が原因なのよ。だから残念だけどガンと同じで治らないわ。」

何だよ、それ…。

「ガンよりも遙かにタチの悪い腫瘍ですね。死ねばいいのに、て言うか、そんなどうでもいいことより、俺の質問はどうなったんですか？」

「あゝ。何で生徒会が君を除いて美少女ばかりなのか、だよね？」

「はい。何でなんですか？」

俺の問いに先輩は意地悪くニヤリと笑った。

「そんなの決まっているじゃない。」

そして、声高々に言い放った。

「私の趣味よ！」

「死んでください。」

「嫌よ。このハーレムがある限り私は永遠なもの。」

もう相手するの面倒だ。

俺は暁先輩から抜け出す為に星華先輩に話しかけた。

「さて…。今日は全員集まって珍しいですね。何をするんですか？」

「今日は…特別枠の…許可と…ランキングの…仕事に…ついて…。」

それにしても、やっぱり今回は美少女ランキング絡みか…。

面倒だなあ、と俺が思っていると今まで黙っていた二人の先輩が口を開いた。

「後輩。今回の審査は先生と君だけだ。是非頑張ってくれ。」

なに、それ!?

滅茶苦茶、面倒じゃん!

「それ、どう言うことですか!?!天先輩。」

その問いに答えたのは天先輩ではなく彼女によく似た少女だった。

「あはは 空うちつてば今更何を言ってるの?僕たち皆、ランキングに出るんだから当たり前じゃん!」

「それ本当か?魅晴!」

「うん。」

しまった。

そう言えば、さっき話題にもあげた様に、この生徒会は三日月学園の中でも選りすぐりの美少女ばかりだったんだ。

俺は改めて生徒会メンバーを一人、一人見てみた。

まずは暁先輩。

性格は置いといて、クォーターならではの銀髪と若干蒼みがかかった目。

更に生徒会の外では、ちゃんとした人を演じているから人望も厚い。

星華先輩。

少し小さくて小動物の様に愛らしい。

かけた眼鏡が若干ずれてるところとかも可愛いし…。

成績優秀で皆に慕われている。

弥生やよい 天先輩あめ。

長い黒髪を1つに束ねてポニーテールにしている。

その鋭い眼光は一見、厳しそうに見えるが意外と優しく話易い。

風紀委員もつとめているので信頼だけで言えば暁先輩より上だろう。

(暁先輩に信頼があるのが信じられないが…。)

最後に弥生やよい 魅晴みはる。

天先輩の妹で髪型はツインテール。

目は大きくパツチリ見開かれていて甘え上手。

しかし意外に頼りにもなるから友達が多い。

今、思えば凄い顔ぶれだよな…。

俺、何でここにいいのかわからねえや。

いや、別に劣等感とかを感じてる訳じゃないデスヨ？

ただ、俺って要らなくね？とか思ってるだけで…。

そんな感じに軽く落ち込んでる俺を無視して、メンバーは会議を再開した。

「えっと、とりあえずランキングの仕事は如月くん任せるとして、問題は特別枠ね…。」

特別枠？

そう言えば、さっき何か言っていたな。

「暁先輩。特別枠って何ですか？」

その質問に天先輩が答えてくれる。

「特別枠と言うのは同じクラスに二人以上、有望な人材がいる場合に許可されるものだ。」

「…？待ってください。それだと他のクラスに対して不公平になりませんか？」

「その通りだ。だから、そのクラスは例え一人が一位になったとしても賞品は受け取れない。」

「ワン、ツーフィニッシュじゃなければ、いけないってことですか？」

「ああ…。」

「でも、それだと特別枠を獲得したクラスに不利じゃないですか？」

「それはない。」

ハッキリと、言いきる天先輩。

「なぜですか？」

「後輩。よく考える。特別枠は、あくまで同等の有望な人材のいるクラスにのみ許可されている。つまり一人が勝ち上がるなんてありえない。」

「あっ！？そうか！」

一人が勝つたら同等である、もう一人も勝たなくては明らかにおかしいからな。

「て言うか、その特別枠はどのクラスに出されるんですか？」

俺が、そう言うと生徒会メンバーが全員固まってしまった。

俺、何か変なこと言ったっけ？

そんな俺に星華先輩が皆を代表して答える。

「…2 B。」

てか前も言ったけど会長は暁先輩だよな？

て言うか？ Bって…。

「…如月くんの…：クラスだよ。」

やっぱりか…。

答えを聞いた俺は今朝であった二人の少女を思い出して、そっと溜め息をついた。

第七話『空の受難』（前書き）

評価、感想のある方は是非ください。
悪い所は直していきたいので…。

第七話『空の受難』

今、ようやく生徒会の会議が終わった。

話したことは3つ。

第1に特別枠の許可。

これは生徒会の全員がOKを出して、更に代表者が校長に承認して貰えば許可される。

ちなみに代表者は星華先輩だ。

何度も言うけど、会長は暁先輩だよな…？

第2に審査について。

今回の生徒会からの審査は俺一人しか出られない。

だから先輩方から審査基準についてなどを、みっちり教えられていた。

暁先輩が何度も邪魔していて大変だったなあ…。

まあ、天先輩が押さえ込んだ後に星華先輩が耳元で説教してからは何もしなくなった…：と云うか顔面蒼白で泣いていたけど…：。

星華先輩、本当に何を言ったんデスカ？

怖くて聞けないのは俺がヘタレだからじゃない。

そう思いたいです…。

第3に新ルール…と言うか御褒美？

優勝者は望めば生徒会メンバーの誰かとデートが可能になった。

でも生徒会で男は俺だけなので、あまり意味を感じないんだけど…。

俺が、そう言うくと天先輩は苦い顔をしていたな。

あの人は男子より女子にモテてしまうから、このルールが一番被害が来るだろう。

ちなみに、このルールを提案したのは暁先輩で可決したのは星華先輩。

暁先輩、あなた会長ですよ？

何か自信が、なくなってかたんデスケド。

と言うか未だにわからないのは、なぜアノ人が会長に選ばれたのか…、なんだけどな。

ちなみに、俺はこれを三日月学園生徒会七不思議と呼んでいる。

他は、あれだ。

なぜ天先輩が主に女子に人気があるのかとか、星華先輩について…。

星華先輩、謎が多いからなあ…。

本人曰く「女の子には…秘密…：…たくさん…」だそうです。

俺は男なので、そこら辺はわかりません。

いや別に、追求するのが怖かったんじゃないぞ？

人には話したくないことが、あるだろうから無理に聞かなかっただけだ…。

信じてくださいヨ？

まあ、別にいいや。

先輩方のことは後々聞いていけばいいだろ？

とりあえず俺は今から生徒会の仕事をしなくてはならない。

仕事と言っても、家のクラスの連中に特別枠を説明してから、もう一人の女子を決めてもらうだけだが…。

ちなみに特別枠の許可があるからと言って必ず二人出さなくてはいけない訳ではない。

ランキングに出る他のメンバーによっては、二人の順位に差が出る可能性もあるからな。

要は二人だすのが絶対に有利って訳ではないってことだ。

それだけを説明すると家のクラスは速攻二人出すことに決まったけどな…。

人の話は、聞いてくださいよ…？

まあ、いいや。

とりあえず最終確認だけして報告しよう。

「本当に特別枠を使うんだな？」

俺の問いにテンションがあがったクラスメイトは心を1つにして叫ぶ。

「「「当たり前だのクラッカー！！」」」

ギャグ古！？

しかも最高に寒い奴出してきやがった！！

何か、いたたまれなくなった俺は早々に生徒会室に帰りました。

生徒会室

「まあ、そんな感じで2 Bからは太陽と花月さんが出ることに決定しました。」

「つまり特別枠は使ったことね？」

「そうなります。」

「わかったわ 星華が校長を脅し…説得して承認させているからメンバーに登録するわね？」

今、脅したって言いませんでしたか…？

俺は暁先輩から目を離して星華先輩を見た。

すると彼女は…。

ニヤリと笑った

俺はマツ八級で速度で目をそらす。

だって怖いんだもん…。

もう俺へタレでも何でもいいです、マジで…。

そんな俺に星華先輩が近づいてきた。

ちよつと暁先輩、何でアナタは離れて行ってるんですか？

怖いんで一緒にいてくださいよ！

「私だって怖いよ！」

「だから心と会話しないでくださいよ！？」

「…怖がらなくても…いい。…優しく…する。」

「星華先輩、それ何か違うから！？あと、アナタも心を読まないで
！！」

この生徒会室で俺にプライバシーはないのか！？

「助けてください！！天先輩！！」

主に俺のプライバシーと貞操を……！！

すると天先輩は大真面目な顔で静かに首を横に振った。

「無理だ、後輩。残念だが、ここに君のプライバシーはない。」

「アナタも心を読んでますもんね！？」

「いや、それは違うぞ……？後輩。」

「何がですか？」

そこで“全員”一呼吸。

「声、でてる（わよ）」

ああ、なるほどね……。

反省したよバカ野郎。

第七話『空の受難』（後書き）

最近、生徒会ばかり書いていてすみません（<―>）

次回からは、ちゃんと太陽と花月さんを出します！
あと、微妙に影薄い魅晴もです…。

第八話『星の願い』（前書き）

今回は視点変更がありますので、あしからず…。

第八話『星の願い』

生徒会の騒ぎが、ようやく終了したので俺は帰ることにした。

今日は緋雲の部活がないらしいので一緒に帰れる。

一人で帰るのって結構寂しいんです。

そう思っていたら緋雲が、こっちに近づいてくる。

「なあ、空。校門の前で待っていてくれないか？」

「別にいいけど、どうしたんだ？」

「ああ…。」

緋雲が苦笑する所を見て得心がいった。

「告白か？あまみませ雨宮さんも大変だなあ。」

「ちやかすなよ！無視する訳にもいかないんだ…。」

「相も変わらず緋雲は優しいなあ。だからモテるのかねえ？」

「うるさい…。」

「あはは…。じゃあ、先に行つとくな！」

まったく羨ましい限りだ。

とは言え雨宮さん、嫉妬深いから緋雲も苦労しているらしいけどね
…。

さて、ただ待つておくのも暇だから生徒会室に行くとしよう。

今の時間なら暁先輩と天先輩だけだろう。

待たなくていいのか？

ああ、アイツは大抵告白を断った奴と思いついてデートするから
いい。

そのせいで余計に雨宮さんが怒っている訳だけど。

と、適当に考えているうちにもう着いちゃった。

俺は生徒会室のドアに手をかけて開いた。

「失礼します。」

そこにいたのは意外な二人の美少女。

花月さんと星華先輩だ。

二人は俺を認めて口を開いた。

「まだ帰っていなかったんですね。」

「…如月くん………空気……読め………。」

「えっ！？俺、何かしましたか？」

入って、いきなり酷すぎると思うんだが…。

「別に、そんなことは言っていないません。強いて言うなら入るタイミングが悪すぎます。」

「…同感。」

「メチャ理不尽じゃないですか！？まあ、いいや。花月さん、こんな時間にどうしたの？」

俺の問いに星華先輩が眉をひそめた。

「…特別枠の…撤回。」

「え…？」

花月さんは溜め息をついて引き継ぐ。

「私は、ランキングには出ません。ですから特別枠なるものを撤回しにきました。」

そう言えばコノ人確か、そう言うのは苦手って言うっていたな…。

「…今更…困る。」

「仕方ないじゃないですか！勝手にクラスの方々が決めて、空も私の意見など聞いてくれなかったんですから！！！」

あの時は寒いギャグのせいで居心地悪かったからなあ。

「ごめん、花月さん。すみません、星華先輩。俺の不備です。特別
枠を撤回していただけませんか？」

俺としても嫌がる彼女を強引に……ってのは気分がいいものじゃない。

だが、星華先輩はそうでもないらしい。

「……撤回は……可能。でも……嫌……。……如月くんが……。……話を……聞か
なかった……。？言い出せない……。自分にも……。……落ち度は……。ある。……正直
……。……不愉快。」

「それは……!!」

なるほど、星華先輩は花月さんが全部俺のせいに行っていると思っ
ているのか？

星華先輩優しいからな。

でも……。

「星華先輩、ランキングはあくまで学校行事ですから嫌がる彼女を
だすのはちょっと……。」

「……わかって……。……る。」

星華先輩は花月さんの前に立ち口を開く。

「……これは……明日……公開する……予定。もし……優勝したら……生徒会の……誰かと……デート……できる……。勿論……暁でも……天でも……そして……」

なぜか、俺を見る星華先輩。

「如月くん……でも……」

「それは本当ですか？」

「もち……。」

花月さん乗っちゃうの!?

意外に、この人も百合なのかな……。

微妙に嫌な事実を知ってしまった……。

その時

「……!?!?」

携帯に着信……?

誰だろ???

「はい、空だけ……」

『緋雲だけど、今はどこだ?』

「生徒会室。今から、そっちに行くよ。」

『早くな〜。』

ブツツと電話がきれた。

早く行かないとな…。

「話の途中で、すみませんが俺は用事があるので失礼します!!」

そう言っただけは、その場から立ち去った。

SIDE 星華

如月くんが、行ってしまった。

まあ、今からの会話は彼に聞かれない方が都合がいいけど…。

「…会話を…戻す。優勝すれば…如月くんと…デート…。」

「わ、私には関係のない話です!」

嘘だ。

完全に、虚どっている。

「…別に…構わない。ライバル…減るだけ…。」

「うっ!?ライバルって何ですか!」

「私も……ランキングに……出る。勝てば……彼と……デート」

「あなた……。」

「……出る、出ないは……自由。でも……忘れないで……彼を狙うのは……私だけじゃない。」

「……。」

後、一押しかな？

「紅葉 花月。あなたは如月くんの……だった」

「なぜ、それを……!!」

「……出る……？出ない……？」

「……アナタは何がしたいのですか？もし、本当にアナタが優勝したいなら、何故アナタは私を出場させたいのですか？何故、自分から優勝の確率を減らすのですか？？」

それは……痛い所だ……。

確かに彼女の言う通り。

私は勝ちたい。

勝って、彼と一緒にいたい。

それなのに……。

「…特別枠を…撤回すれば…如月くんが…責められるかも…。
私は…そんなの…認めない…。」

嘘だ

本当は、そんなことなど思っていない。

それなのに何で…？

私ハ何ヲシテイルノ？

「…出る…？」

私の一言に、彼女はついに頷いた。

これでいいの？

私にはわからないよ、如月くん…。

第九話『雨と雲、空につつまれて…』(前書き)

説明が少し長くなってしまいました、すみません……() ……()

第九話『雨と雲、空につつまれて…』

美少女ランキングまで、後少し。

今日は生徒会よりランキングの審査基準を確認する日なのだが…。

「俺が言うんですか!?!」

「ええ、そうよ だって私達も出るし…」

「あつ…!?!」

そうか。

よく考えれば、そうだよなあ。

毎年、ランキングの審査基準の確認は審査をする生徒会の代表。

つまり、俺以外にいないんだっただ。

しかし、暁先輩…。

「何で本番5分前に、そんな大事なことをいうんですか!?!」

「忘れてた」

この人は本当に…。

俺は「ふざけないください!」と文句を言おうとしたのだが…。

『これより三日月学園美少女ランキングのルール確認をいたします。校長、生徒会、新聞部代表は前に…』

「如月くん、出番みたいね？」

「狙ってやってるでしょ？」

「何のことかしら？」と、しらを切る暁先輩を尻目に、俺は渋々ながらもステージに立つことにした。

予測できなかった俺も悪いんだから、と言つ言い訳を頭に浮かべながら…。

とは言え、やはりここに立つのは嫌だなあ。

勘違いするなよ？

“ここ”って言うのはステージの上を指すのではなく、校長と新聞部代表に囲まれた“この”ポジションのことだ。

あの星華先輩ですらも引き気味の校長（脅していたが）と、緋雲のことで絶賛お怒り中の雨宮さん。

俺限定で作られた様に気まずい雰囲気だ。

そんな中、説明会は始まってしまった。

『まずは校長先生の御話です。』

アナウンスの声と共に出てきたのは銀髪の美女だ。

彼女は興味なさげに、口を開いた。

「話なんて面倒ね。先に進んでくれない？」

「「えええ〜！！」」

うん、皆の心の突っ込みが聞こえてくる。

柘ついで夕じゆう。

三日月学園の校長にして、無類の美少女好き。

本人自体も大人のフェロモン溢れる超美人。

銀色のセミロングの髪に整った目鼻は一見すると優しそうな雰囲気だ。

見掛けは20代の後半くらいに見える。

実際の年齢は36以上だから詐欺じゃないかと思うくらいだ。

だが騙されてはいけない。

名字からわかる通り、暁先輩の母親でハーフでもある訳だが…。

親娘そろって、性格は最悪だ。

「如月くん、退学にされたいの？」

「職権乱用ですよ。柊校長。」

それ以前にナチュラルに心を読みやがった……！！

校長は暁先輩と同じ様にニヤリと意地悪く笑う。

「知らないの？職権は使う為にあるのよ？」

「そうかも知れませんが、少なくとも自分の為に使うものではありません。」

「でも自分の為じゃないと使う気がしないでしょ？」

「それは貴女だけです。」

「そうかしら？」

「そうですね。て言うか、そんなに俺を退学にしたいんですか？」

本気なら少しやばい。

そう思っているとやはり彼女は笑っている。

「うふふ……まさか！私と暁ちゃんの、お気に入りを手放すわけじゃないじゃない。」

「親娘そろって俺を玩具にする気ですか？勘弁してくださいよ……。」
すると彼女は、さっきの数倍は嬉しそうな表情になった。

「そうね。私としては、とても残念だけど暁ちゃんに嫌われたくないから、やめとくわね？」

「それは遠回しに暁先輩が俺を玩具として独占しようとしているって言いたいんですか？」

「うふふ…」

無言の肯定が逆に怖い。

「そこは否定してほしかったです…。」

本当に暁先輩があと10年もすれば、こうなるんじゃないかって位に似てるな。

て言うかそうなる、前にあの人と交流を切った方がいいんじゃない…。

「無理だと思っわよ？」

「ですよ。て言うか心を読まないでください！」

本当に親娘そろって…。

「うふふ… そう言わないで、あの娘とは仲良くしてあげて？ 貴方といる時の暁は、とても自然だわ。貴方には、とても感謝しているのよっ。」

「本当にそうなら俺を解放してくださいよ。」

「無理」

またニヤリと意地悪く笑う柊校長。

しかし、そんな姿を見せられながらも本当に彼女達は親娘そろって憎めない…。

彼女の初めて見せる親としての一面を知りつつ心底そう思ってしまった。

『次は生徒会と新聞部代表から、審査基準とルールを発表します。』
柊校長と話しているうちに俺の出番みたいだ。

俺の左にいる雨宮さんは凄く不機嫌そうに説明をし始める。

雨宮さん、声が怖い！

全校生がドン引きしているんですけど…。

たぶん、また緋雲が告白を断った子とデートしたんだろう。

相変わらず嫉妬深いな…。

雨宮あまみや 五月ご。

緋雲の彼女で普段はクールな美少女だが嫉妬深い。

一度マジギレして緋雲にボディブローをいれたこともあったな…。

緋雲曰く「それだけ思っていてくれるんだよ」らしい。

本当に人間が出来ていることで…。

ロングの髪に白いカチューシャをつけていて、肌は透き通る様に白い。

緋雲の件で怒ると、真っ赤になるのが面白かったりする。

まあ、その時は笑っている余裕はなかったけど…。

そんなことよりルールを聞いておくか…。

少しずつだが毎年かわっていくらしいし、今回は審査もしなくてはならないからなあ。

そう思いながら雨宮さんを見る。

彼女はハキハキと、淀みなく話しているので聞きやすかった。

今回のランキングのルールは意外と簡単なものだ。

それぞれがコスプレしてのパフォーマンス。

ちなみにコスプレ自体もパフォーマンスに直結させる必要がある。

過度な衣装は禁止。

もしも出てきたら、その人のクラスの待遇は最悪になってしまうらしい…。

「…以上です。これより生徒会審査代表の如月くんが審査基準を説明してもらいます。」

そんな感じで雨宮さんの説明は終了。

彼女は礼をして目配せで俺に前が出る様に促した。

遂に俺の番か…。

俺は雨宮さんからマイクを受け取り、話を始める。

「生徒会審査代表の如月です。これより審査基準を発表させていただきます。今回は衣装、パフォーマンス、作法の3つが基準になります。」

そこで一呼吸。

かまない様に気を付けなければ…。

「まずパフォーマンスと衣装はそのままの完成度が点になります。そして問題は作法ですが、これだけは減点方式を取らせていただきました。簡単に言うかと振るまいですね。例えば衣装やパフォーマンスが過激過ぎたり、暴言などがあれば減点の対象となります。つまり先の2つの和から作法を引いた点が自分の点となります。」

そこで、もう一呼吸。

「以上が審査基準となります。出場される皆さんは頑張ってください。それと、さっきのはあくまで我々の基準ですので出場されない方々は、ちゃんと自分の基準を持ってください。生徒会からは以上

です。質問があれば後で直接どうぞ。では…」

そこまで言って持っていたマイクを雨宮さんに返してから、そっと安堵の息をもらした。

かまなくて、よかったー！ー！

そうして波乱(?)の説明会は終了した。

後は質問を受けるだけなのだが…。

「落ち着け！雨宮さん！！」

今は緋雲をヤバイ目で見ている彼女を押さえています。

「何を言っているの？私は落ち着いているわ。落ち着いて冷静に緋雲を…」

「何する気だ！？やめてくれ！緋雲も反省してるし何時ものことじやん！！」

ちなみに緋雲は土下座中です。

俺の言葉を聞いた雨宮さんは暗く笑い出した。

「そう…。何時ものことなのよね。毎度やるなら反省なんてするな
ー！ー！」

「ごもっともですね…」。

「とにかく一度、落ち着いて話し合い！あんまり縛りつけると緋雲が兩宮さんに愛想つかしちゃうかもよ？」

と言って兩宮さんを止めようとしたのだが…。

「おい、空！俺が五月に愛想をつかすなんて世界が破滅しようとする有り得る訳ないだろうが！！」

「……／／／」

緋雲の、のろけで兩宮さんの白い肌が真っ赤に…。

まあ、おとなしくなったからいいや。

「とにかく二人で、ちゃんと話し合えよ！」

俺の言葉に「おう！」と叫ぶ緋雲と小さく頷く兩宮さん。

とりあえず一件落着きたいだな。

俺は緋雲に無言で遊園地のチケットを渡して、彼女の機嫌を取るように促してから質問を待つ。

なぜチケットを持っていたか…？

喧嘩になるのは、わかっていたから先に買っておいたただけだ。

毎度、違う所のチケット探すのは苦労するんだぜ？

まあ、これで二人が仲直りできるなら安いものだけだな…。

「あの…。よろしいですか？」

「あっ！？はい、質問ですね？」

忘れていたけど俺、今仕事だった。

背中から聞こえる声に急いで俺は振り向いた。

そこにいたのは長身で黒髪の美少女…。

「あれ…？花月さん。どうかした??」

俺の言葉を聞いて、彼女は不機嫌そうな顔になってしまった。

「質問です。いけませんか？」

「いや、いけなくはないけど…。」

「じゃあ、何ですか？」

低い声出して睨まないでください。

美人に睨まれると怖いんですけど…!!

「花月さん。ランキングに出るんだなあ〜って思っただけです。」

俺の言葉に花月さんは、ニコリと微笑んだ。

『いけませんか…?』

せ、背中から黒いオーラと般若が…!!

俺、何か変なこと聞きましたっけ!?

「いや、花月さんなら大歓迎だよ。応援するから頑張って!」

「…はい。」

俯いて頷く花月さん。

「あの女のせいで…」

よくは聞こえないけど、何か言ってるし、背中からオーラが最大級に膨れあがって…!!

これ、やばいだろ!

「か、花月さん!質問あるんでしょ?」

俺の言葉を聞いて花月さんは思い出した様に顔をあげた。

「そつでした!?空、 “こすぶね” とは何ですか?」

第十話『四つの光』（前書き）

少しシリアスに入っていきます。
評価、御感想があればどうぞ！

第十話『四つの光』

「“こすぶれ”とは何ですか？」

花月さんの、この言葉にたいして俺には説明をするだけの語学力がなかった。

て言うか説明したくなかった。

何も知らない無知な少女に、そんな知識を教えたい奴はいないだろう！

それに実際に見せて説明した方が分かりやすいし。

別に俺に、そういう趣味がある訳ではないぞ？

まあ、いい。

そう言う訳で俺達は今“ここ”にいる。

「着いたよ。花月さん。」

「ここは...?」

「い、いいから入る?」

「...???」

俺達が今、いるのはコスプレのオーダーメイド店。

何で、そんな店を知っているか…？

星華先輩に教えて貰っただけだ。

あの人も何だかんだ言って毎年ランキングに出るから、この手の店には詳しいんだろう。

本当に俺の趣味とがじゃないですよ？

まあ、いいや。

俺は、とりあえずドアに手をかけて扉を開く。

すると中には…。

「やつほ〜 空くんにカツツちゃん！」

「うふふ。これは偶然ね？二人とも。」

「…早く……入る。」

美少女三人組が普通にいました。

「太陽、暁先輩、星華先輩！？何で皆が…？」

俺の問いを聞き、暁先輩はニヤリと意地悪く笑った。

「この店のことは星華から聞いたんでしょ？私達もランキングに出るんだから星華の知る、この店にいてもおかしくないはずよ…？」

「なるほど…。じゃあ太陽は？」

「私は、魅春に聞いて来たの。生徒会の先輩に教えて貰ったらしいから、いてもおかしくないでしょ？」

「なるほど。それにしても、皆がそろうなんて凄い偶然だな。」

その言葉に花月さんは顔をしかめる。

「“偶然”ですか…。」

「どうかした？花月さん。」

「いえ、何でもありません。」

どうかしたのだろうか…？と思ったが、本人が何でもないと云うのだから大丈夫だろう。

冷たいと言っなよ？

人には話したくないことだってあるんだから、あまり踏み込み過ぎてはいけない。

俺に出来るのは、場を盛り上げて彼女の不安を和らげる位だ。

「皆は、どんな服を着るんだ？」

「あれ？空くんってば興味津々。もしかして、そう言う趣味でもあるのかなあ？」

「バカ言つな！俺はいたって正常だ！！」

「うふふ。どうかしら？人間ってわからないものだし…。」

「勘弁してください。本当に興味本意ですよ！」

「…どのみち…教えられない。」

「…？何ですか？？」

「だってコスプレってインパクトが大事でしょ。空くん、審査員の一人なんだから見せれないよ。」

「それも、そうか。」

「それじゃあ…。」

「花月さんの…どうしようか？」

「元々、彼女の衣装を買う為に来たのに…。」

「これじゃあ、本末転倒だ。」

すると俺の言葉を聞いた太陽が、無邪気に笑ってくる。

「心配しないで、私達が協力してあげるよ。」

「そうね。そうしましょう。」

「…私…も？」

何故か星華先輩だけ露骨に嫌そうだ。

生徒会室での一件と言い二人は馬があわないのかも知れない。

まあ、太陽と暁先輩だけでも事足りるだろう。

「わかった。俺は何か飲み物でも買って来るよ。皆、花月さんの」と頼む！」

俺は、それだけ言ってそのまま近くのコンビニへ向かった。

SIDE花月

空が去った後、私達は“普段”と同じ様に話しを始めた。

「改めてお久しぶりです。暁“先輩”と星華“先輩”。」

「あら？何で、そんな棘のある言い方をするのかしら？ああ、ごめんね？？二人のデートを邪魔しちゃって。」

と相変わらず意地悪く笑う暁さん。

私は彼女を睨みつける。

「幾つか聞きたいことがあるのですが…」

「なぜ如月くん…いえ、空を生徒会に入れたか…でしょ？」

「はい。空に近づかない。それが私達のルールだったはずですが？」

「そう言う貴女も破ってるじゃない。」

「ええ。そこは言い訳しません。でも、それは貴女方のせいでしょう？」

「…それ……言い訳…。」

「私も同感ね。知っているのよ？本当は貴女が一番、あのルールに反対していたのは…。」

「それは…。」

事実だ。

私は上手い言葉を見つけられずに言い澀んでしまう。

そんな私を見かねて太陽が静かに口を開いた。

「暁さん、星華さん。カッツちゃんを虐めないで。二人もカッツちゃんの気持ち痛い程わかるはずでしょ？どのみち先に破ったのは私達。それなのに一番我慢していたカッツちゃんを攻めるのは、おかしいよ。」

彼女の言葉に二人は顔をしかめる。

「…確かに……太陽の…言う通り……。私達は…結局……誰も…過去を…捨てきれしていない…。」

「そう言うことよ。花月。彼を生徒会に入れたのは悪かったと思っ

ているわ？ だけど我慢できなかった。貴女達と私達の彼に対する思いは違う。それだけは、わかってくれないかしら？」

「わかっていきます。痛い程に…。星華さん、“あれ”は誰にも言うてませんよね？」

「…もち……。」

“あれ”だけは、ここにいるメンバーにすら知られたくない。

私は彼女に不本意ながらも頭を下げておいた。

「ありがとうございます。星華さん。」

すると彼女は顔を背ける。

「…礼は……。要らない。…気持ち……。悪い……。」

「それでも…ですよ。」

私と彼女は“昔”から折り合いが悪い。

正確には私が彼女に嫌われているだけなのだが…。

月の光は星を隠す。

それが私達の関係。

「さてと。そろそろ暗い話はやめにして始めようか」

「うふふ。腕が鳴るわ。」

「えっ！？一体、何でしょうか？」

「勿論、コスプレ」

「忘れたとは言わせないわよ？」

にじり寄って来る二人に私は少しずつ後退していく。

しかし、すぐに追い詰められて…。

「ちよっ！？やめ…待って…！！そ、空…！！」

SIDE空

適当に時間を潰して帰ってきた俺を待っていたのは…

「ぐすっ…。ひぐう……。そらあ。」

と、抱きついてくる花月さん。

ただ、その格好は…フリフリしたスカートに豪華な装飾の、いわば
ゴスロリ。

本人が人形のように美しいので、黒色と相まって…。

すっごい可愛い！！

こう言うの…悪くないかも知れない……。

とか不謹慎なことを考えていると…。

「如月くん、ちょっと、こっちに…」

「空くん、何を考えているのかなあ」

「……不愉快……。」

「え」と…?」

その後、俺は何故か三人がかりでボコボコにされましたとさ…。

俺が何をしたって言うんだよ!!

第十話『四つの光』（後書き）

今回は物語のキーになる四人の会話です。

あらすじにも書かれています様に“空”は平凡ですので、そこからへんは勘違いのないように、お気をつけください。

第十一話『始動』(前書き)

意外に続くもので、気付けば十一話…。

こんな話を読んでくれている皆さんには感謝・感激・雨あられです

(古い?)

第十一話『始動』

「レディース&ジェントルマン。これより三日月学園美少女ランキングを開催いたします。」

『わああ〜!〜!』

…と云うことで今からランキングが始まるらしいんだけど……。

「MCは私、雨宮 五月が努めさせていただきます。」

『わああ〜!〜!〜!』

「ツッコミ所が多すぎだ、バカヤロー!〜!」

「うふふ。いきなり、どうしたの?如月くん。」

「柊校長……。」

いや、色々おかしいと思うんですけど……。

まず第一に場所が……。

「あら……?せっかく甲子園球場をかりきってステージまで作ったのに不満??やっぱり時代は世界??じゃあ、適当にエベレストを……」

「やめてください!〜!あと心を読むな!〜!」

この人なら、やりかねないから怖いよ！

柊校長は、つまらなさそうに腕を組む。

「いいじゃない。どうせやるなら派手にいきましょうよ。」

「物事には限度があるでしょー！」

「暁ちゃんと同じことを言わないでよ。」

おお…。

流石は暁先輩だ。

やっぱり一応は生徒会長だし、思考はマトモなんだなあ！

と俺が思っていると柊校長は頭を押さえながら…。

「でも流石に今から月の開発は少し時間が…」

「ちよつと待て！！月って何ですか！？さっきのセリフの流れに、おかしいでしょー！！」

「えっ…？だって、あれでしょ？貴方、暁ちゃんと一緒に『物事には限度があるから、どうせなら限度一杯までいきましょうよ』ってことじゃないの…？」

「言っていないし、その言葉はそんな意味じゃない！！」

「まあ、細かいことは気にしないで来年に期待してね」

「いや、マジでやめてください！て言うか月が“細かいこと”って、
どういふことですか！..」

「うふふ...」

不敵にニヤリと笑う柊校長。

相変わらずスケール大き過ぎるだろ！

いや、もういい。

今日は、もう絶対にツッコミ入れねえぞ！

例えMCの声が凄く凹凸なく無表情だろうと、ステージがマジック
とかできるような細工を施してあるとか、観客席が既に生徒以外で
一杯とか、何か総理っぽい人や大統領っぽい人やらがいるとか..
..。

「やっぱりツッコミ所が多すぎだ、バカヤロー！」

明らかに、おかしいだろ！

何で皆、当たり前前みたいな顔でいるんだ！

あれか！？

俺の方が、おかしいのか？

いや、落ち着けよ俺！

惑わされるな!!

俺は正常だ。

だって俺、平凡な人間だし!!

「言ってるて辛くない？」

「だ〜か〜ら〜」

「あっ!?!もう始まるみたいよ？」

「本当ですか??」

俺がステージを見ると、そこには10人の美少女がいる。

「あれ…?今年は去年より少くないですか??」

いつもはクラスにつき一人は出る。

家は学年につき5クラスあるから15人は出るはずなんだけど?

俺の問いに柊校長はニヤリと笑った。

「今年は特別なのよ。」

「特別…?」

「ええ…。今年は去年と違って優勝できるけど出場しない子がいな

い。」

「そんな人が、いるんですか？」

「勿論。貴方の身近に一杯ね…。」

「花月さんとか…？」

「うん。紅葉 花月、弥生 天、暁ちゃん。あと出場しるけど途中で辞退した夏住 星華、春日 太陽。」

「暁先輩、出てなかったんですか？」

「あの子、こう言うのが苦手なのよ。意外かしら？」

「いえ、それは何となく知っていました。でも暁先輩が、そんな理由で他人からの頼まれ事を断るのは少し意外ですね。」

あの人は基本的に、生徒会メンバー以外に対しては、責任感やカリスマ性溢れる人間だったりする。

そんな俺の言葉に柘校長は、いつもの意地悪い笑みではなく、憂いを帯びた美しい笑みを浮かべた。

「如月くんは暁ちゃんを、よく見てるわね？確かに、断ったのには相応の理由があるわよ??？」

「そうですか。」

そんな俺の答えに、柘校長は笑顔を絶やさず口を開いた。

「聞かないの？」

「何をですか??？」

「暁ちゃんが他人からの頼みを卑下するのに値する、相応の理由。」
そんな彼女に俺は思わず苦笑いを浮かべた。

「話すつもりなら既に言っているでしょ？話したくないんじゃないですか??なら、聞きません。」

俺の言葉に彼女は「そっか…。」と言ってステージを見据えた。

かつてない競争率を誇る三日月学園美少女ランキングが、もうすぐ始まる。

第十一話『始動』(後書き)

次から、ようやく美少女ランキングが正式に始まります。

長々と引つ張って、すみませんでした。

第十二話『三日月学園美少女ランキング／前編』（前書き）

かなり雑になってしまいました。

あと、更新遅れてすみません！

学校が始まったもので、これからも遅れますがご了承ください！！

第十二話 『三日月学園美少女ランキング／前編』

今ここに三日月学園史上、最もハイレベルな戦いがくり広げられていた。

その中で歓声と共にMC雨宮さんの平淡な声だけが、よく聞こえる。

「はい。3 Cの西園寺さんは、合計で350点です。現在は三位です。最後の総決算にかけてください。」

総決算って言うのは俺達5人の審査点と全校生の支持率（投票制）の和のこと。

生徒一人につき一点だ。

まあ、それはどうでもいいや。

しかし今年はマジでレベル高い。

しかも審査基準がめちゃくちゃ厳しく、出ている生徒のほとんどが点を取れずにいる。

今の所は4人が終わったのだが平均点は385点。

とは言え、先にでた4人には悪いが場が暖まってきた今からが美少女ランキングの本番だ。

しかも何の偶然か10人中、綺麗に生徒会メンバー＋太陽＆花月さんを除く4人が先に出た。

つまり、ここからは誰が優勝してもおかしくはない本命ばかり…。
審査員として、俺も楽しみだ…。

「うふふ。美少女が一杯いるわ。どれも食べ頃…」

隣には明らかに楽しみ方を間違えて、妄想に入っている奴もいるけど、気にしないでくれ。

そんなことより、次は誰が出るのだろうか…？

俺の、その疑問に答えるように雨宮さんの平淡な声が響き渡る。

「美少女ランキング5人目の出場者は弥生 魅晴さんです。」

その声と同時に、ステージから多彩な色の煙が勢いよく爆発する。

て言うか無駄な所に金かけてんじゃねえー！！！！

「やるなら派手にいかなきゃ駄目でしょ？」

隣の柘校長は、このさえ無視の方向で…！！

俺が心のツツコミを入れてみると、ステージの煙が晴れて魅晴が登場した！

その格好は

「レオタード？それ、コスプレか？？しかも服装的に過激だし…。」

俺の疑問に柊校長は楽しそうに笑った。

「まあ、一応はコスプレになるんじゃないかしら？それに彼女なら体型的に過激にならないから平気よ。」

まあ、確かに…。

彼女は太陽に次ぐ幼児体型だからなあ。

「審議の結果、弥生さんの服装は自らの幼児体型のおかげでセーフらしいです。」

審議とかした覚えはないんですけど…。

と言うか聞こえていたんですか、雨宮さん!?

ちなみに魅晴は流石に大舞台なので俺らを睨むだけですませた。

彼女はマイクを取って可愛らしく頭を下げる。

「弥生 魅晴です。今から新体操を披露するから皆、ちゃんと見てね!」

新体操…?

なるほど、だからレオタードか…。

そう思っていると魅晴の演技が始まってしまった。
パフォーマンス

まずはムチ。

クルクルと回しながら自身も幻想的に動く。

そして、どこから取り出したバトンを一度上空に投げた。

それらが落ちる間に体とムチを回してボールも上空にあげる。

落ちてきたバトンをムチで受け取り、ボールを手で掴む…。

一連の動作は1つ1つが、とても優雅で美しい。

こんな特技があつたなんて知らなかった。

魅晴の演技は素晴らしく瞬く間に終わってしまった。

流石は本命の一人。

会場は彼女の演技でヒートアップしていく。

「魅晴ちゃん、さいご〜」

「好きだ〜」

「優勝決定だろ!!!」

おい、最後の奴!

優勝決定は、この後の子達の演技をみてからにしろ!

まあ、そんな感じで興奮冷めやまぬ中点数が発表された。

「弥生さんの点数は…423点です。」

魅晴、すごいな！

今までの点数を余裕で上回り、彼女は暫定一位となった。

様々な歓声の中、次の出場者が呼ばれる。

「次は弥生さんの姉の弥生 天さんです。」

瞬間

凄まじい女性特有の甲高い声が会場内に響き渡る。

「天様〜!!」

「相変わらずかっこいい〜!!」

「『結婚してええ〜!!』」

天先輩、凄い人気だ。

て言うか、この学校は百合ばっかりかよ!?

確かに天先輩は格好いいけど、ちゃんとした可愛い女の子だぞ!!

「うう…。天ちゃん、いいわね。私も美少女にもてたいわ。」

そういえば校長から、既に百合だったな…。

「て言うか天先輩、何であんなに女子ばかり人気あるんだろ？」

顔とかも綺麗だから男から、もつと人気があってもいいような…。

俺が、そう考えていると柊校長は、ニヤリと笑ってメモ帳らしき物を開く。

「弥生 天。元々は男女問わずモテていたけど、とある日から女子が男子を圧迫しだして現状に至る。備考としては、毎日来るラブレター（女子から来る）を全部読んで、返事を出しているらしい。」

「柊校長…。ちなみに、そのメモ帳は…：…？」

「これ…？これには家の学校の美少女の情報をすべて網羅させてあるの。暁ちゃん以外ならスリーサイズまでね。」

それって犯罪じゃ…。

「違うわ！これは私の趣味だもの…！」

「何を堂々と言っているんですか！？それは、立派な、犯罪、です…！」

わざわざ一言ずつ区切って言ってやった。

しかし柊校長はニヤニヤと笑っただけだ。

「例え犯罪でも、それは私には意味のなさない言葉ね？言うておく

けど柊家当主の私が警察に捕まると思っつかしら?？」

「何で権力って厄介な人のもとに集まるんですかね。」

「うふふ。それは逆よ? 厄介な人だから権力を手に入れられるのよ。」

「俺には縁遠い話ですね。」

「そうかしら? 暁ちゃんと結婚したら手に入るんじゃないの??」

「そんな物の為に魂売る程、俺は落ちぶれていませんよ。」

「それは残念 気が変わったらいつでも言っただろ?」

「はい。まあ、それは世界が壊滅してもありえませんが…。」

「うふふ…」

と、話がそれってしまったな。

柊校長と話している間に、既に天先輩はステージに出てきていた。

天先輩のコスプレ。

それは…。

「カウボーイ!??」

しかも馬までいるし!

てか天先輩、すごい格好いい!!

どうやら会場の皆さんも同じ気持ちのようで…。

「天様、素敵!」

「もう死んでもいい!」

とか言っている。

て言うか、そこまで!?

しかも何人が鼻血出して倒れてるし…。

天先輩。

服って時には凶器にもなるんですね…。

て言うかカウボーイの格好でパフォーマンスって、どうするんだろ
う?

馬もいるし、もしかしてテキサスみたいなので人を引きずり回す
とか…?

な〜んてな。

天先輩は常識的な人だから、そんなことは…。

「ちよっつ!?!校長!勝手にステージに入らないでください!?!」

「格好いい美少女……。天ちゃんは私の嫁！いや、婿！」

「これで、落ち着け！」

「ん……？首に縄が……。待って！？引きずらないで！これは冗談だから！……きゃああー！ー！ー！」

ありましたね。

でも、これは柊校長が悪いから仕方ない。

「えー。ただいま不審者が現れましたが気にしないでください。」

雨宮さん。

それは少し酷……。くもないな。

雨宮さんは、そのままポーカーフェイスで天先輩にマイクを渡す。

「今からするのは射撃だ。ちなみに、こいつは本物だが気にしないでいい。どうせ外れない。」

いや、メツチャ気になりますよ！？

大体、銃自体をどこから輸入して来たんだよ！

「それは私がやったわ。警察を脅して……。」

「蘇っちゃったんですか……。残念です。」

「美少女あるところに私は不滅よ！」

「あっ！？始まった。」

俺に無視されて、ちよつと悲しそうに睨む柊校長。

それをよそに、天先輩のパフォーマンスが開始する。

彼女のパフォーマンスは簡単で、次々に出現するのを狙うものだが…。

早速、天先輩の前に的が二つ。

それを連射で撃ち抜くと、次は後ろ。

て言うか天先輩。

銃って反動がすごいから両手で持つものじゃないんですか？

普通に片手でバンバン撃ってるんですけど！？

あんた何者だよ…。

そんな俺をよそに、パフォーマンスが終わった。

点数は425点。

魅晴に姉の貫禄を見せて暫定一位におさまった。

第十三話 『三日月学園美少女ランキング／裏』 (前書き)

遅くなって、すみませんでした!!

言い訳は後書きです (T|T)

第十三話 『三日月学園美少女ランキングノ裏』

現在は美少女ランキングも前半が終了して、熱気冷めぬ中、一時間のインターバルに入った。

そんな中、俺はとりあえず先に終わった魅晴と天先輩の様子を見にきたのだが…。

「花月さん、星華先輩。落ち着いて!？」

なぜかすごく火花を散らしている、お二方をなだめています。

別に喧嘩をしている訳じゃないみたいだ。

ただ単に双方にらみ合っているだけ。

控えの空気を悪くするくらいに…。

ほかの出場者は、その空気が原因で皆どこかに行っている。

こう言う時に最も頼りなる天先輩も…。

お願いですから、早く帰って来てください。

俺は切にそう願った。

「二人とも仲良く楽しくしてください!これは学校行事ですよ!!--」
すると二人が、ようやく目を俺に向けてくれる。

「私は…楽しんでる……。」

「私もです。」

「「彼女を倒すのを、とても楽しんでいる（います）」」

おいおい。

二人とも何でこんなに仲が悪いの？

彼女らの間に何かあったのだろうか？

完全に途方にくれてしまった。

何気に俺は、この二人には頭が上がらない。

控えは二人によって絶対零度になりつつある。

そんなとき

「何をしているんだ、二人とも！」

ドアがバンツと開かれてカウボーイの格好をした天先輩が現れた。

「天先輩！？」

何かすごく格好いい！

俺は心の中でホッと一息ついて、彼女に飲み物を渡した。

「お疲れさまです。」

本来は出場を終えた全員に渡すつもりだったのだが仕方がない。

飲み物を受け取った天先輩は少し思案して口を開いた。

「ありがとう、後輩。気が利くな。気が利くついでに、すまないが部屋を空けてくれ。」

「……。はい……。」

なぜかは、わからないが俺がいると困るのだろう。

俺は、おとなしく従った。

「誤解はしないでくれよ、後輩。別に君が邪魔な訳ではない。二人に軽く説教をするだけだ。気にしないでくれ。」

「わかりました。でも、程々をお願いします。二人ともランキングがありますし……。」

「了解だ。後輩は相変わらず優しいな。」

「天先輩は、いつもと違って饒舌ですね。」

「後輩……。」

「それじゃあ、俺はこれで……。二人とも頑張ってください。」

俺は、それだけ言っただけで部屋を後にした。

SIDE天

気づかれたかも知れないな。

私は部屋から出て行った後輩を見て、ため息をついた。

あの子は鋭い。

そして、優しい。

だから何かに気がついていても聞きはしない。

そんな彼を今、私は壊そうとしているのかも知れないな…。

私は部屋に残った二人に向き合った。

「二人とも幾つか聞きたいことがある。」

二人は無言で頷く。

それを見て私は言葉を紡ぎ出した。

「今から私が聞くことは君たちの答えたくないことだ。従って無理に答える必要はない。」

「私“たち”ですか？」

「意味が…わからない……。」

「それは、なぜだ？」

「私たちに共通の秘密などないからです。」

「同感…。」

その言葉に私は苦笑した。

たいしたものだ。

ここまで言えば聡い二人ならば既に薄々気づいているはず。

しかし、それでもまったく表情に出していない。

それだけ知られたくない事なのだろう。

今、私はそれを掘り出す。

「二人に確認するが本当に身に覚えはないんだな？」

「はい。」

「それが、空のことでもか？」

一瞬

二人の身体がギクリと強ばった。

それに私は確信を得た。

「星華、花月後輩。君たちが初めて空後輩に出会ったのいつだ？」

「私は去年からです。彼とはクラスが同じでしたから。」

「私も…。生徒会で…彼と出会った……。」「

「それは本当か？」

「どういう意味でしょうか？」

「そのままだ。君たちは、この学校に入学する前から既に彼と面識があった。違うか？」

「違う…。」「

「彼女の言う通りです。だいたい、そんなことを隠す必要がありますか？」

「その理由を聞きたいのだ。紅葉花月、そして“如月”星華！」

その言葉に二人は目を見開いた。

そして花月後輩が懸命に言葉を紡ぎ出す。

「せ、星華先輩の名字は夏住ですよ？お忘れですか？」

「ああ、確かに彼女は夏住星華だったらしいな。だが、それは10年前前のことだろう。」「

「意味がわかりません！」

「なぜだ、花月後輩。このことは私より君の方がよく知っている」と
とどろろ。」

「何のことでしょう？」

「ふむ。まあ、無理に話せとは言わない。私自身黙秘は認めた訳だからな。」

「まるで私が嘘をついている、と言っているように聞こえますが…。」

「それは、そうだろう。そう、言っているのだからな。」

「あなた…！」

花月後輩が柄にもなく怒りを見せてきた。

しかし、それも隣の星華に止められる。

彼女は、こちらをにらみつけた。

「天…。何が…言いたいの…？」

「言っ…いいのか？」

「もち…。」

「なら言わせてもらおう。星華、君は空後輩の…義姉だろう？」

「それで…?」

「それで、とは?」

「仮に…私が…如月くんの義姉だったとして…何が…悪いの? あなたにそれを…どうこう言う…権利がある?」

「それは…」

言葉が澱む。

だが、その時

控えのドアが開かれた。

そして、それと同時にいつもの余裕をもった声が部屋に響いた。

「二人とも、天は全部知っているわ。もう、隠す意味はないわよ?」

その言葉の主は我が学校の生徒会長。

柊 暁

彼女の登場に、ここにいる全員が目を見開いた。
当然、この私も。

「暁さん、貴女の出番は次でしょう!用意はどうしたんですか!?!」

「え、さぼる。」

「「「……!?!」」」

私たち全員が息詰まる。

「君は何を言っているんだ！君が出ると言ったから今年は私や魅晴も出たんだぞ！！」

「そんなの知らないわよ。出場権は出場者にあるハズよ？違つかしら？」

「それは……」

「まあ、いいじゃない。そんなことより天。この話は後夜祭が終わってからにしない？今ここで、これ以上彼女たちにこの話題をするのは生徒会長、柊 暁として許さないわ。二人のメンタルに関わる。」

「その時に全てを包み隠さずに教えてくれるなら。」

「それは無理ね。」

「なら……」

「天！」

「……」

「人には入りすぎてはいけない領域があるの。この話は私たちにとつて、その最たるものよ。わかって、天。」

「わかった。だが、おおまかな事情は話してくれ。」

「わかったわ、約束します。」

「暁さん…!!」

花月後輩が暁を睨むが、彼女はそれを一瞥した。

「花月、先に言ったように天は全てを知っている。もし何かを隠して事態が悪化し、空に知れたら貴女に責任がとれる?」

「…ツツ。わかりました…。」

渋々ながら彼女は引き下がる。

代わりに星華が口を開いた。

「天…。彼には…秘密に……しておいて…ね?」

「ああ、わかった。約束しよう。」

私としても彼を苦しめる真似はしたくない。

そんな私たちの様子を見て、暁は最後を締めくくった。

「この話はここで終わり。二人とも用意をしなさい。そろそろ出番よ?」

ニヤリと笑うその様は、あまりにも何時も通りで苦笑してしまう。

私は静かに目を閉じて部屋から出た。

とりあえずは着替えをしなくては…。

そのころ会場

「暁先輩（ちゃん、様）はどこだー！ー！ー！」

あの人また、さぼりやがったな！ー！ー！

第十三話 『三日月学園美少女ランキングノ裏』（後書き）

学校が始まって、勉強との折り合いがつきませんでした。

これからは、もう少し早くしますので、よろしければ読んでください！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4697g/>

空に輝く光

2010年10月12日03時10分発行